

「日本の伝統的自死に見る道德観と美意識」 2011年9月16日、南山大学

川田順造（神奈川大学特別招聘教授・日本常民文化研究所客員研究員）

この報告では、人類学的研究の対象として、自殺一般ではなく、本人が自覚的に選択し実行する「自死」の、日本の事例に認められるいくつかの側面をとりあげる。史実としての自死、史実に多少とも拠った演劇や散文の作品に描かれた自死、さらに自死が演劇や散文の主題となり、それを公衆が愛好する事実に見られる、日本文化の道德観と美意識を問題にする。(a) 切腹、(b) 切腹も含む殉死、(c) 心中死、の事例を検討する。

(a) 切腹：4つの範疇に大別 ①自己の名誉を保つため（絶望的負け戦での自死）、②赦し乞い。①②は、切腹に拠らない自死としては、日本以外の多くの社会にも存在。③死んだ主君への殉死 (b) の手段として（森鷗外『阿部一族』（1913）を主に参照）。④刑罰として強制されて（「赤穂浪士」の一件における浅野内匠頭、討ち入り後の浪士たち等）。(c) 心中死：相愛の男女が来世での恋の成就を願って共にする自死だが、心中死自体に性行為の代替的性格もある（近松門左衛門『曾根崎心中』1703 など9作、書方軒『心中大鑑』1704、紀海音他作の心中物10作 1702-1782（『心中物脚本全集』三星社1927）、モーリス・パンゲ＝竹内信夫訳『自死の日本史』ちくま学芸文庫1992、村松剛「心中の美學」『死の日本文学史』中公文庫1994、小林恭二『心中への招待状：華麗なる恋愛死の世界』文春新書2005、等を主に参照）。商人の世界に多い婿養子縁組、江戸時代の都市生活における、独身男女の状況。情と義理、「世間」の問題。

親子は一世、夫婦（相愛の男女）は二世、主従・師弟は三世の観念。日本化された仏教思想の転生観念に基づくのではないかと思われるが、由来は不明。中国文化や韓文化にはないという。日本で文献初出は、能『巴』作者不詳だが世阿弥作の言い伝えあり恐らく15世紀前半に成立。以後の文献、浄瑠璃、歌舞伎台本にはこの観念は頻出。主君のために我が子を犠牲にする浄瑠璃、歌舞伎台本は多い（「寺子屋」、「先代萩」など）。

自死を罪惡視するキリスト教世界での相愛の男女の相対死の例：フィクションでは、ロミオとジュリエットの誤解に基づく後追い心中、謎の多い「マイヤーリンク事件」（1889年ウィーン郊外狩猟館でのオーストリア皇太子ルドルフと愛人マリーとのピストルによる情死？）、シュテファン・ツヴァイクと再婚の若い妻との亡命先ブラジルでの服毒自殺（1942年2月22日）等。

川田既発表文献：“Der Doppelselbstmord als kulturelle und religiöses Phänomen in Japan”, *Der Tod in den Weltkulturen und Weltreligionen* (hg. von Constantin von Barlowen), Diederichs, München, 1996: S. 228-245; “Moral and Aesthetic Aspects of Suicide among the Japanese: Seppuku, Self-Immolation, and Shinjû, Double Suicide of Lovers”, *Sterben von eigener Hand: Selbsttötung als kulturelle Praxis* (hg. von Andreas Bähr u. Hans Medick), Böhlau Verlag, Köln, 2005: S. 277-290.